

## 「やうてう」私注

## はじめに

能〈清経〉には、笛方の習事である小書「恋音取」がある。莊重な笛の音色に導かれるように、ゆっくりと時間をかけて登場するシテの姿は、清経と笛との緊密性を雄弁に語っている。ただし、〈清経〉の物語の中心は、形見の「髪」をめぐる夫婦の遣り取りであり、詞章の中に「笛」に関する語が見えるのは、次の箇所だけである。

腰よりやうてう抜き出だし、音も澄みやかに吹き鳴らし(六段「クセ」)

この「やうてう」は「横笛」という字が宛てられ、「笛」として理解されている。しかし「横笛」は、一般的に「ヨコブエ」もしくは「オウテキ」と読むはずであり、「ヨウジヨウ」という読み方はかなり特殊である。

「ようじょう(やうてう)」の語を辞書で引くと、次のように説明されている。

歴史的かなづかいは「やうてう」とも。「横笛」の字音「おうてき」が「王敵」に通じるのを忌んで読みかえたものという。(『日本国語大辞典』)

このように、「王敵」を忌んだ読み方として、「ヨウジヨウ」が生まれたと説明されることが多いが、この説の初出はそれほど古くない。

平家談ようてう按ずるに、永保元年二月十日水左記改元ノ條云人々申云永長対馬音似笛名、これ證とするに足ル、わうてきと云へば其音王敵に通ずるを以ての義歟、猶後考を俟(『錦所談』)

この天保五年(一八三四)の序をもつ山田以文撰・山田有年編の随筆が、王敵忌諱説の初出と考えられている。このような江戸後期に見られる説の信憑性は、当然問題となるはずであり、「王

伊海 孝充

「敵」に古い用例が少なく、疑問。」(福田晃氏・小林美和氏・佐伯真一氏校注『平家物語上』(三弥井古典文庫、二〇〇〇年)という見解も示されている。

本稿は、この「やうてう」の意味をめぐる私的注釈である。この語句は、能(清経)と本説である『平家物語』のほか、『義経記』に見られる程度である。この語が各作品でどのように理解されてきたのかを考察し、「やうてう」が「横笛」のことであったかを改めて考えてみたい。

## 一、「ヨウジヨウ」の用例

「横笛」を「ヨウジヨウ」と読む例は、意外と古くからある。鎌倉時代には成立したとされる十卷本『伊呂波字類抄』には「横笛」を立項し、「キヤウチャウ」と振仮名が付されている。さらに、文学作品の中にも用例を見いだすことができる。

箏のことかきならされたる、おやう定の吹きすまされたるは、何ぞの春とおほゆかし。(『更級日記』。日本古典文学大系本(西下經一氏校注、岩波書店、一九五七年)による。)

まさこ君の横笛(伊海注:底本は「やうぢやう」)吹あはせ給へる音は、雲居にすみのぼりて:。(『夜の寝覚』。日本古典文学大系本(阪倉篤義氏校注、岩波書店、一九六四年)による。)

『更級日記』は「ジャウ」の音の借字として「定」を用いており、『夜の寝覚』の底本は「やうぢやう」と仮名書きとなつてゐる。いずれも平安時代末期には成立していたと考えられる作

品だが、『平家物語』や能を遡る用例であるかは慎重に考える必要がある。『更級日記』は定家自筆本を底本としているが、明治になってその存在が広く知られるようになった『夜の寝覚』の引用本文は、近世初期筆の松平文庫本を底本としており、他の伝本の成立もすべて近世を下るものである。平安・鎌倉時代には存在したであろう本文に「やうぢやう」という語があつたかは疑問の余地がある。

このように考えるのは、『義経記』の例があるからである。このテキストは室町時代中期ごろの成立と目されることが多いが、「やうてう」が五例も存在する(以下、本文は便宜的に日本古典文学大系本(岡見正雄氏校注、岩波書店、一九五九年)を挙げる)。

- 1 あとをも用へかしとおもはれければ、漢竹の横笛とり出し、半時ばかり吹きて、音をだにあとの形見とて、泣くく鞍馬を出で給ひ:。(巻第一「遮那王殿鞍馬出の事」)
- 2 折烏帽子の片々をきつと引立てて、松風と名づけたる漢竹の横笛を持ち、袴の稜高らかに引上げ:。(巻第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」)

- 3 「学問のみに候はず、横笛に於ては日本一とも申すべし」と言ひければ:。(巻第七「平泉寺御見物の事」)
- 4 御髪尋常に結びなして、赤木の柄の刀に彩みたる扇差し添へて、御手に横笛持ちて御出である。(同右)
- 5 琵琶をば念一殿の前に置き、笙の笛をば弥陀王殿の前に置き、横笛は判官の御前に置き:。(同右)

義経(牛若)と笛とは密接な関係があることは周知のとおりで

あり、笛の描写は各巻に散見できるが、これを「やうてう」と呼ぶのは、この五箇所のみである。『邦訳日葡辞書』には、Yogu (ヤウチユウ (横笛) Fuye (笛) に同じ。笛) のほかに、Canchicuno yugio (カンチクノヨウチヨウ (漢竹の横笛) この名で呼ばれた笛) を立項しているように、1・2の「漢竹の横笛」という表現は、中世ではかなり流布していたようである。

本来、『義経記』ではこの「漢竹の横笛」という表現のみに「やうてう」が使われていた可能性がある。巻第七には三箇所も集中して、「横笛 (やうてう)」が使われているが、この表現は古態を示していると考えられている田中本や赤木文庫本などには見られず、3〜5は、単に「笛 (ふえ)」と記されている。『義経記』は、各巻ごとに異なった生成過程を踏んだという指摘もなされているように、巻第七「平泉寺御見物の事」に見える「やうてう」は、後出である可能性が高いのではないだろうか。「やうてう」が「笛」の異称であるという理解が広まる過程で、本来、単に「笛」とあった表現に「やうてう」が入り込むケースは、大いにあったと思われるのである。

『義経記』は成立時期には、いまだ多くの問題があるが、「漢竹の横笛」という表現は室町時代中後期には流布していたと想像される。しかし、文脈からこれが「笛」であることは理解できても、これにどのような漢字を宛てるべきなのかという理解は、それほど広がついていなかったと考えられる。前掲の『邦訳日葡辞書』が「漢竹の横笛」を笛の一種として理解しているのもその一例であるが、管見に入った限り、『義経記』諸本は写本・版本含めて「横笛」を宛てるものはなく、すべて平仮名で

「やうてう」「やうてう」と記しているのである。

『伊呂波字類抄』の例もあるので、鎌倉時代には「ヨウジウ」＝「横笛」という理解があったのは確実である。しかし、その理解は、それほど広く定着していなかったと考えられる。

## 二、『平家物語』の「やうてう」

『平家物語』諸本の中で、「やうてう」は主に読み本系統の巻第六「小督」・巻第八「大宰府落」に見られる。

ひかへて是をき、ければ、すこしもまがふべうもなき小督殿の爪音なり。楽はなんぞときければ、夫をおもふてこふとよむ想夫恋といふ楽なり。さればこそ、君の御事おもひ出まいらさせて、楽こそおほけれ、此楽をひき給けるやさしさよ。ありがたふおほえて、腰よりやうてうぬき出し、ちつとならひて、門をほとくとた、けば、やがてひきやみ給ひぬ。(小督)

小松殿の三男左の中將清経は、もとより何事もおもひれたる人なれば、「宮」をば源氏がためにせめおとされ、鎮西をば維義がために追出さる。網にか、れる魚のごとし。

いづくへゆかばのがるべきかは。ながらへはつべき身にもあらず」とて、月の夜、心をすまし、舟の屋形に立出でて、やうてうねとり朗詠してあそばせられるが…(大宰府落)

「小督」は高倉院が寵愛した小督を、笛の名手高仲仲国が嵯峨野へ探しに行く場面で、『源平盛衰記』の同一箇所(小督局事)にも「やうてう」が見られる。「大宰府落」は平清経が入水す

る場面であり、いずれも、笛と深い縁のある人物の出来事の中で、「やうでう」という表現を用いているのである。

『平家物語』では、他にも八坂系諸本第二類（城方本）や百二十句本の巻第五「月見」に「やうでう」が見える。福原から京へと戻ってきた左大将実定が、待宵の小侍従としみじみと月を眺め、物語りした夜に今様を朗詠する場面で、

人しづまつて後、やうでうねとり、さうく／＼枯なんとす。

むしのおもひ、ねんごろよいふ。朗詠して古き都の荒ゆくやうを今様にこそうたはれけれ。（八坂系諸本）

と描写されている。これは、一部の八坂系諸本にしか見られない表現なので、前述の『義経記』巻第七の例のように、「小督」「大宰府落」に使われていた表現が転用された可能性が高いと思われる。

また、長門本巻第四の硫黄島に流された成経と康頼が、「本宮」に参詣した場面で、次のようにある。

各々能を尽さんとて、少将に拍子をうたせ奉りて、舞を面白くまひすましたり、少将はやうぢやう取出して、萬秋楽の秘曲を吹かれけり

長門本の成立には諸説あり、他の用例との前後関係は俄に定めがたいが、「やうてう」が様々なかたちで『平家物語』の中に流れ込んでいることを示す一例となっている。

この「やうでう」は、『平家物語』の中でどのように理解されていたのだろうか。正徳元年（一七一）以前成立の野宮定俊著『平家物語考証』には「狗朝葛日横笛和訓やウデウヤウテウト書ヘシ」とある。この「狗朝葛」は、鎌倉時代の雅楽家・

狗朝葛のことだと思われるが、彼が著した『統教訓抄』『掌中要録』には、この説は見えない。定俊は本書編纂にあたり、『玉葉』『山槐記』といった歴史史料などを用いているので、他の史料に見える言説かもしれないが、管見に入らなかつた。この説の情報源には問題があるにしろ、近世の注釈書には、「横笛」説は散見でき、ある程度認識されていたことがわかる。

これら注釈書成立以前から、『平家物語』諸本の中では、「横笛」説を採用する伝本がある。享祿本（享祿三年（一五三〇）～四年奥書）・平松家本（室町時代写）・鎌倉本（江戸中期写）が「小督」「大宰府落」の両方、両足院本（大永六年（一五二六）頃写）・竹柏園本（室町時代末期写）が「大宰府落」のみ、「横笛」という表記を用いている。また百二十句本では、「大宰府落」では「よこふえ」と記しているので、「やうてう」が「横笛」であるという理解が、遅くとも室町時代後期には存在していたこととなる。

しかし、その理解が広く定着していたとは言い難い。「横笛」と記す伝本の中で、八坂系諸本第四類に属する両足院本以外は、屋代本と覚一本系の中間的性格を有するといわれる諸本群で、互いに影響関係が指摘されている。今回、『平家物語』諸本はすべて精査したわけではないので、他に「横笛」と記す本もあるかもしれないが、「やうてう」≡「横笛」という理解は、ほぼこの一部の諸本群で共有されていたものと推測される。その証拠に、版本ではこの「横笛」説を採用した本はない。『平家物語』は慶長元和期に出版された古活字版を皮切りに、整版本を含めると三十種程度が刊行されているが、そのすべてが「や

うてう」「やうてう」の仮名書きとなっているのである。

中には、「楊笛」(兩足院本・如白本)「楊条」(竹柏園本)などの語を宛てる写本もあるので、やはり近世を通じて「やうてう」の理解には混乱があったと考えられる。平曲譜本も同様であり、岩瀬文庫本などに「横笛」説が見られるが、ほとんどが仮名書きである。現在では、多くの注釈書が王敵忌諱説を挙げ、「横笛」を宛てているが、そう決める明確な根拠があるわけではなく、近代に入り、緩やかにそう理解されるように至った観がある。

### 三、能〈清経〉の「やうてう」

能のなかで、「やうてう」という語は〈清経〉のみに見られる。この語の意味は、能の中ではかなり早い段階からわからなくなっていた。豊臣秀次の命によって編纂された最古の謡曲注釈書『謡抄』では、次のように説明されている。

ヤウテウ 笛ノ名ト申シツタユル也。但、字未考得(庶民文化資料集) 能 伊藤正義校注、三一書房、一九七八年。

この部分の詞章は「やうてう抜き出し、音も澄みやかに吹き鳴らし」となっている。文脈からも「笛」を指していることはわかる。『謡抄』は、どのような字を宛てるべきかはわからなかったが、文脈から「笛ノ名」と判断したのである。『謡抄』の影響が色濃く表れている享保十三年青地兼山序『百謡摘解』でも「笛ノコトナリト云ツタヘタリ」と同様の解釈が見られるが、江戸中期の思想家小栗了雲が編纂した『小栗了雲謡注』で

は、

葉濂ハ笛云也太平御覽云黄帝伶倫昆溪ノ竹採テ笛ヲ製ス  
吹レ之風ノ鳴ヲナス云云

と「笛」と理解し、「葉濂」と字を宛て、「呂氏春秋」などに見える音楽起源説に関係づける解釈も見られる。ただし、この段階では「横笛」という字を宛てる説は、踏まえられていない。

謡曲注釈書に「横笛」説が見えるのは、享和三年(一八〇三)蘭馨亭刊の『謡語須知』であり、「よこ笛のこと也」とある。

これにはなぜ「ヨウジョウ」と読むのかは言及されていないが、その六年後の文化六年に加賀金沢で内組百番分が編まれた『謡言粗志』(文化六年)には次のようにある。

詹々言云横笛ヲヨウデウト云事或人云昔朝鮮人対馬へ来テ  
横笛ヲヨウテウト云シヲ対馬人聞伝ヘテ今ニ云ル也中山大  
納言記ニ説ノカハリタルヲ書ルニ対馬音ニ横笛ヲヨウデウ  
ト云如シト云ヘリトソ云云

『詹々言』は寛延三年(二七五〇)に刊行された松岡玄達の随筆であるが、これを踏まえて『錦所談』に見える記事に類似した説を挙げている。朝鮮人が横笛を「ヨウテウ」と呼んでいたという説を挙げ、その呼び方が『中山大納言記』に見えると記しているのである。謡曲注釈語に、前掲の王敵忌諱説は見えないが、江戸後期には「やうてう」は「横笛」のことであるという理解自体は、徐々に広まっていた。

しかし、この理解が「定着」していたとはやはり言い難い。長らく〈清経〉の謡本に、「横笛」説が採用されることはなかったからである。室町時代から江戸時代初期の写本譜本は、ほぼ

「やうてう」か「やうでう」であり、「謡抄」に記されていたように、どのような字を宛てるべきなのがわからなかったようである。「やうてう」に漢字を宛てる例は、法政大学鴻山文庫蔵石田盛直節付本「横調」、同蔵南都社家伝来謡本「陽篠」、法政大学能楽研究所蔵下掛り六徳本系謡本「楊篠」くらいであり、いずれも漢字からは意味がわからない。

この状況は江戸時代の版本においても同様であり、すべて平仮名表記となっている。漢字表記に独自の方策が働いている明和改正謡本（上掛り）や西森六兵衛政春・吉田徳兵衛刊本（下掛り、通称「六徳本」）なども平仮名表記になっているので、やはり正確に意味が把握できていなかった文字だったのではないだろうか。

〔清経 謡本に「横笛」の宛て字が初めて用いられるのは、明治四十一・二年刊観世流改訂謡本であろう。他流派は、大正・昭和に刊行される謡本でようやく「横笛」説を採用するようになるので、現在、諸注釈書で定説となっているこの説が定着したのは、実はかなり遅いのである。謡本は謡の稽古本であり、どう発音するかが重要であるからこそ、読み方が難しい字を宛てることが憚れたことも考えなければならぬが、他の難読語が漢字表記されることもあるので、「やうてう」はその意味が正確に把握されてこなかったことが原因であった可能性が高い。

#### 四、「やうてう」と「音取」

以上、「やうてう」がどのように理解されてきたのかを用例

から確認した。「やうてう」は鎌倉時代には「横笛」と把握されており、その理解は近世まで一部の世界で継承されてきた。ただし、「横笛」という理解はなかったにしろ、「やうてう」が「笛」のことを指しているという理解は広く共有されてきたといえる。

しかし、「やうてう」はもともと「笛」のことを意味していたのだろうか。この疑問の根拠は、「横笛」を「ヨウジヨウ」と読む用例が、ある一部分の作品内にしか認められない点、「横笛」について詳述する音楽関係資料に「ヨウジヨウ」という読み方が記載されていない点にある。例えば、天福元年（一二三三）成立の『教訓抄』は、「横笛」の項目に、「クワウテキ」と振り仮名を施し、「又羌笛云・龍吟云 龍鳴云」と異称を列挙し、『統教訓抄』はこれに加え、「龍笛」「風笛」「横吹」の異称を挙げている。両書とも、他にも笛の名器を紹介するなど、横笛について詳述しているが、「ヨウジヨウ」という読み方については言及していない。「ヨウジヨウ」の読み方がある程度認知されていたら、詳細な「横笛」の解説にそのことが言及されていしかるべきだろう。

『伊呂波字類抄』のような辞書に、「ヨウジヨウ」の読み方が記載されているので、「横笛」がそう読まれることもあったのは確かであったが、「横笛」は「ヨコフエ」と読むか、『教訓抄』の例のように、「オウテキ」と読むのが一般的だったはずである。なぜ「ヨウジヨウ」と読むかは、近世に生まれた説であるだけに、こう読むに至った経緯には、何らかの問題があったと考えられるのである。

そこで、可能性の一つとして、何らかの訛伝であったことを考えてみたい。結論から述べるのなら、中国音楽・日本音楽の音階の一つ「平調」の訛伝の可能性である。「平調」は雅楽などに用いられる十二律や六調子の一つとして見えるが、平調は仮名書きすると、「ひやうて(で)う」「ひやうち(ぢ)やう」と表記される。この仮名書きが、「笛」のことを指す語として誤解されるようになってしまったと考えられる。

この推測の根拠は、「やうてう」が『平家物語』『大宰府落』で「やうてうねとり朗詠して」、「月見」で「やうてうねとり、さうく枯なんとす」と「ねとり(音取)」と接続する表現の中で用いられているからである。音取は、演奏前に音程・音調を整えることであるので、「調子」に関する語句と密接な関係がある。例えば、世阿弥伝書には次のような用例がある。

①調子をば機が持つなり。吹物の調子を音取りて、機に合すまして、目をふさぎて、息を内へ引きて、さて声を出せば、声先、調子の中より出る也。調子ばかりを音取りて、機にも合せずして声を出せば、声先調子に合ふ事、左右なくなし。(『音曲口伝』一調二機三声)

②先、暫、初心習道のために於いては、一調・二機・三声の入門より、曲声の次第を分別すべき事。横・主の二あり。呂律に取らば、横は呂、主は律なるべきやらん。調子を合んで音取る機は主なり。(『風曲集』)

③祝言は、呂の声にて謡ひ出べし。深き習ひ有べし。まさしく、其座敷にての時の調子は有もの也。此座敷にてはいか程成べきがよかるべきと、勘へ見べし。先、心をよくそ

れになせば、一日二日稽古したる程にむかふ也。能々心を静め、調子を音取りて、謡ひ出べし。(『申楽談儀』)

①②は「機」の重要性を説く一説であるが、その中で「調子を音取り」という表現が見られる。①にあるように、音取は笛などの吹物で行なうことが多かったので、「笛(横笛)音取」という表現が、まったくの誤りであるわけではないだろうが、「笛にて音取り」や、「笛にて調子を音取り」という表現がより適切なはずである。語り本系の『平家物語』には、「大宰府落」以外に「音取」の用例は見られないが、『源平盛衰記』には「笛を吹鳴して、時の調子黄鐘調に音取すましたり」(巻第八「法皇三井灌頂事」)、「大將は腰より笛を取出、平調に音取つ、」(巻第十七「隋堤柳事」といった用例も見られる。

このことは、『平家物語』の「やうてう」の理解にも少なからず影響をあたえていると思われる。『平家物語』諸本の中には、「大宰府落」の「やうてう」に、「やう調」の字を宛てるものがある(葉子十行本・米沢本・内閣文庫本)。これらの本が「調」の字を宛てたのは、「音取」との関係が強いと考えられる。延慶本の「月見」にあたる箇所では、

腰より「あまの上丸」といふよこぶえをとりいだし、ひやうてうにねとり、こきやうのありさまをいまやうに作り」(第二中「実定卿待宵ノ小侍徒二合事」)

となつている。このように、「平調に音取り」のかたちになっているのが、「やうてう」と誤って伝わり、その後笛と理解されるようになったのが、この語の正体なのではないだろうか。能(清経)を含めて、「やうてう抜き出し」という表現も多い

ので、俄に定めがたいが、一つの説として示し、大方の批判を俟ちたい。

注

(1) 「稚児観音縁起」には「漢竹の横笛心凄く吹き鳴らし」という表現があるが、漢字表記のため、読み方は不明。稚児の持つ笛と密接な関係のある表現だったのかもしれない。

(2) 以下の引用は覚一本の翻刻である日本古典文学大系『平家物語』（高木市之助氏校注、岩波書店、一九五九年～一九六〇年）による。また、これ以降に参照した『平家物語』諸本は、以下の通りである。

城方本（『平家物語 附承久記』国民文庫刊行会、一九一一年）、百二十句本（新潮日本古典集成『平家物語』水原一氏校注、新潮社、一九七九年～一九八一年）、享禄本（『享禄書写録倉本平家物語』高橋貞一氏解説、雄松堂出版、一九七八年）、平松家本（『平松家旧蔵平家物語』古典刊行会、一九六五年）、両足院本（『両足院本平家物語』伊藤東愼氏・大塚光信氏、臨川書店、一九八五年）、竹柏園本（天理図書館善本叢書『平家物語竹柏園本』（八木書店、一九七八年）、

その他の諸本は、国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルム・紙焼き写真で確認した。また、『平家物語』諸本に関しては、『平家物語大事典』東京書籍、二〇一〇年）に拠る。

(3) 今回は、国文学研究資料館蔵のマイクロフィルム及び紙焼き写真を用いて、版本全種を調査したが、すべて「やうでう」「やうてう」「やうちょう」「やうちょう」という仮名表記で

あった。

(4)

「笛々言」の内容は、『謡粗志』ほぼ同一で、次のようにある。横笛ヲヨウデウト云て或人云昔シ朝鮮人対馬へ来て横笛ヲヨウデウト云シヲ對馬人間傳へて今ニ云ヘル也中山大納言記ニ讀ミノカハリタルヲ書ケルハ對馬音ニ横笛ヲヨウデウト云如シト云ヘリトソ（東洋文庫蔵写本を国文学研究資料館紙焼き写真で閲覽）

『中山大納言記』は、この記事が確認できない。

【付記】

私が大学院に入学したとき、表先生の授業の演習は世阿弥自筆本の輪読であった。発表者は事前に、先生から資料の添削を受けることになっていた。私が自分の担当曲（知章）の資料を見ていたとき、先生は資料を一通り御覧になり、いつもより柔和な表情で「作品研究はまず語釈だから」とおっしゃっていた。この言葉は、私にとって、今でも大切な戒めである。心よりご冥福をお祈り申し上げる。

なお、本稿は、國學院大學松尾葦江氏研究室科研費共同研究「文化現象としての源平盛衰記」研究発表会「源平盛衰記と芸能」での口頭発表がもとになっている。

（い かい たかみつ・本学専任講師）